



▲「アマ時代も含めてボウリング人生初の個人タイトル。本当にうれしい」と坂本

今年デビューの宮澤拓哉(61期)が、初日の予選(10G)を7G目の300を含む2486を叩いて、2位につける原口優馬に171ピン差をつけていた。しかし「初日と同じコンディションのはずだけど、まったく違って感じられた」と、最終日の準決勝、決勝ラウンドロビンはやや苦しんだ。その決勝ラウンドロビン7G目に坂本に首位の座を明け渡したが、ポジション

マッチで2ポイント逆転してトップシードを獲得した。坂本は2位、そして原口が3位でステップラダーに進んだ。

坂本と原口の3位決定戦は、原口が3フレからのフォースで先行すれば、坂本も5フレからフォースで追走、ほぼ横並びのまま9、10フレ勝負に持ち込まれた。原口の9フレは⑥⑦⑩の痛恨のスプリット。「左レーンは厚め厚めにいていたので、内に寄ってアジャストした結果で、後悔はない。それよりもまだチャンスがあった10フレを持ってこれなかったのが、まだまだだなと思う」と振り返った。

原口を下して勝ち上がった坂

ドリスタカップ 2023プロボウリング男子新人戦

8月24・25日
ドリームスタジアム太田

坂本就馬が3年目の真価 姉(かや)と新人戦姉弟制覇

ドリスタカップ2023プロボウリング男子新人戦は、58期から61期までの男子プロ35名によって争われたが、坂本就馬(59期・永山コパボウル)が優勝、初タイトルを獲得した。姉の坂本かやも同じデビュー3年目に優勝しており、姉弟での新人戦制覇となった。またアマの部は17歳の渡邊楓選手(JBC・坂東ファミリーボウル)が優勝した。

(主催：(公社)日本プロボウリング協会 特別協賛：ドリームスタジアム太田)



▲アマ時代の2017年に優勝経験のある宮澤だが、プロ初タイトルはお預け



▲3位決定戦の6フレブルックリンストライクでライオンがわからなくなると原口

気持ちが前に出てしまった。決勝の相手は、期は自分が先輩でも実績は二人の方が上。全力で楽しもうと思って投げた。ずっとお姉ちゃんと比べられて生きてきた(笑)。次はレギュラートーナメントでも優勝を狙いたいし、男女共催の大会で、姉と同時優勝も夢。

優勝ボール：900GLOBALリアリティ・チェック



▲アマの部優勝は17歳の渡邊選手

本と、トップシードの宮澤の優勝決定戦は、宮澤が1フレのストライクをターキーへつなげてリードを奪う。坂本が5フレから初のダブルを持ってくと、宮澤は7フレ③⑤⑥をカバーミスでオープン。その後「レーンの変化にアジャストできないまま終わってしまった」と、201でフィニッシュ。8フレか

ら渾身のターキーで223と伸ばした坂本が、3年目で初タイトルを獲得した。

坂本のコメント

予選からずっと、熱くならないで冷静に投げることを心がけたけど、ラウンドロビンのポジションマッチだけは、勝ちたい

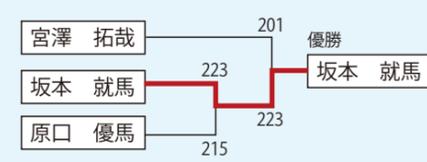


▲10フレ1投目のストライクで勝負を決め、万感のガッツポーズ



▲左から4位・石田、5位・田中、6位・土方、7位・前田、8位・藤永

●決勝ステップラダー



●優勝決定戦

宮澤 拓哉	30	58	78	98	118	135	143	162	181	201
坂本 就馬	20	40	60	80	108	128	148	178	204	223

第22回アジアジュニアボウリング選手権

マスターズ戦で齋藤大哉選手が金星



▲マスターズ戦、3人で金、銀、銅メダルを獲得、左から濱崎、齋藤、渡辺の各選手(写真提供:アジアボウリング連盟)

アジアボウリング連盟(ABF)が主催する第22回アジアジュニアボウリング選手権が、アジア圏の13の国と地域から129

選手が参加して、8月20日から25日まで、シンガポールで開催された。

日本からは、男子は廣岡光希

(埼玉・県立川越初雁高1年)、齋藤大哉(埼玉・川口市立戸塚中2年)、長尾脩甫(福岡・近畿大学附属福岡高3年)、座波政斗(沖縄・県立首里東高3年)、女子は我孫子美葵(宮城・古川学園高2年)、渡辺希哩(群馬・前橋市立前橋高3年)、濱崎りりあ(神奈川・県立綾瀬西高3年)、種瀬楓華(三重・県立四日市農芸高3年)が出場した。

日本チームは、女子4人チーム戦で、前半をトップで折り返したものの、後半地元・シンガポールに39ピン逆転されて悔

しい2位だったのをはじめ、男女のダブルス、4人チーム戦でいずれも銀メダルだった。最終種目のマスターズ戦には、オールイベントの上位男女各16名が進出したが、女子は個人総合3位の濱崎、4位の渡辺、男子は6位の齋藤、7位の廣岡、9位の座波の各選手が出場した。

16名による総当たり戦の上位3名が決勝ステップラダーに進むが、女子は濱崎選手が2位、渡辺選手が3位で進出、3位決定戦は二人の対戦となったが、濱崎選手が243:172で勝ち上がった。優勝決定戦(2Gマッチ)は接戦だったが、シンガポールのLIM SHI EN選手に335:358と23ピン及ばず2位だった。



▲齋藤選手の金メダルをチームメイトも涙の祝福(写真提供:シンガポールボウリング連盟)

男子は齋藤選手が堂々のトップでステップラダーに進むと、優勝決定戦では3位決定戦を勝ち上がってきたシンガポールのAIMAN LIM選手を415:393で退け、日本に待望の金メダルをもたらせた。唯一の中学生でチーム最年少の齋藤選手は、初日のシングルス戦銅メダルを含め、全種目でメダルを獲得する大活躍だった。(4面に関連記事)